



▲環境型かいぼりが普及する契機となった井の頭池かいぼり

◇環境対策としてよみがえった「かいぼり」

かいぼり（池干し）はため池を維持管理する手法で、農閑期に水を抜いて底泥を排出し、池底や堤体を干して池の貯水機能を長持ちさせることが目的です。水田耕作が盛んだった昭和40年代ぐらいまでは各地の農村で定期的に行われていたようですが、農業技術の変化、減反政策、農業従事者の転出や高齢化などによって水田やため池が放棄され、多くの場所でかいぼりの慣習が途絶えています。

1990年代になると、かいぼりが水質改善や外来魚駆除に効果が高いことがわかってきました。これらの課題を抱える自治体などが公園の池や濠でかいぼりを行うようになりましたが、こうした「環境型」かいぼりは、なかなか普及しませんでした。主流化していくきっかけとなったのは、2014年に行われた井の頭池かいぼりです。観光スポットとして知られる都立井の頭恩賜公園で、水を抜いた池で大勢のボランティアが作業する様子が報道されました。これを契機にかいぼりが認知されるようになり、東京周辺を中心とした公園の池などでかいぼりの実施例が増加していきました。

◇悪貨が良貨を駆逐するという危機感

昨今はかいぼりが市民権を得るようになり、かいぼりをアレンジしたテレビ番組も放映されています。タレントが胴長を着てかいぼりを行うなど、10年前には想像できませんでした。かいぼり番組は話題になり、新聞や雑誌にも取り上げられてブームとも言える状況です。

ただし、番組に登場したかいぼり現場をいくつか確認してみると、排水は不完全、外来魚が残っている状態で作業を終了、池底を干し上げずに湛水、外来魚をあついで戻している、といった状況が見られ、これは環境型かいぼりではないことがわかります。かいぼりをテーマにした番組企画でタレントらの奮闘ぶりを見て楽しむ、エンターテインメント型（エンタメ型）のかいぼりです。

厄介なのは、このエンタメ型と環境型の違いについての理解が、自然環境の専門分野にいる方にも浸透していないことです。エンタメ型のメリット・デメリットを解説し、こういうかいぼりも良いのではないかと寛容に捉えている専門家もいます。しかし、当会が関与していたかいぼりの中には、かいぼりをやりたい主体（市民団体、自治体、所有者等）がエンタメ型に傾倒していった環境改善の目的を見失い、水辺再生の機会を逸している事例がいくつかありました。

前述のようにエンタメ型かいぼりでは環境が改善されないため、エンタメ型の模倣事例が増えると、かいぼりによる環境改善効果を疑問視したり批判したりする方々が現れ、やがてはかいぼりそのものが廃れていくのではないかと危惧しています。また、世の常として、エンタメ型は一過性のブームで終わる可能性があります。これから先の水辺再生や保全活動のあり方を考えると、当会としては、エンタメ型かいぼりのデメリットをきちんと説明し、環境型かいぼりを普及していくことが重要であると考えています。

◇失敗しないかいぼりのためのヒント

テレビ番組に頼らずに、目的意識を持って環境型かいぼりに取り組んでいる事例も多くあります。しかし環境型かいぼりが行われる場所は公園などの公共施設が多いので、農村のかいぼりと違って経験の積み重ねがありません。事業主体、受託者、協力団体のいずれも経験値が少なく、とりわけ初回には苦労が多いようです。

当会は、市民参加による自然再生を進めていくために、こうした方々をサポートし、かいぼりで失敗しない・させないためのノウハウを蓄積してきました。ここでは、これからかいぼりを準備する方や、一生懸命やってみただけで結果がイマイチだったと感じている方に向けて、かいぼりで失敗しないためのヒントを4つ紹介します。おそらく、当たり前のようなことしか書いてありませんが、真理はそういうものです。これらの項目を押さえながら、悩みすぎずに、まっとうなかいぼりを実施してほしいと思います。

STEP 1 まず、テレビ番組を断る

番組誘致は、かいぼりで失敗するはじめの一歩です。そのかいぼりは、池を再生すること（環境型かいぼり）が目的ですか？ そうであれば、エンタメ型かいぼりと一致点を見いだすのはとても難しいです。番組には応募しないか、もし先方から打診が来ても断りましょう。

上述のとおり、かいぼりのスタンスや目的が違うので、排水・外来魚駆除・干し上げのどれをとっても、どこまでやるかという目標がまったく違います。番組を上手に利用してウィンウィンの関係を目指したらいいと仰る方もいますが、そのやり方で本当に自分たちも「ウィン」できるのか。環境改善効果を得られるのか。番組制作者ではなく専門家の意見

を聞いて、吟味してほしいと思います。

番組を誘致する大きな動機の一つに、テレビに出たい、有名になりたいというのがあります。しかし、バラエティ番組の放映は1回です。もし有名になりたいのであれば、かいぼりによる環境改善の取り組みをニュースとして報道してもらえるように、新聞や報道番組に働きかけましょう。複数の媒体に取り上げられることもあります。さらに、かいぼりで環境改善効果が確認されれば、今度はそれらの媒体から問い合わせがあり、再び報道してくれるでしょう。

あなたの公園事務所の展示コーナーに、かいぼり後の成果の新聞記事が掲示されているのと、「テレビ出演しました！」という昔の写真が掲示されているのと、どちらを望みますか？

STEP 2 逃がした外来魚は大きくない

池の水を抜いて魚を捕るにあたっては、「外来魚を1匹も残さずに救出しよう！」と意気込む必要はありません。大事なのは、外来魚を取り残さないことです。逃がした外来魚は大きい。かいぼり後に繁殖してしまったら、元の木阿弥になります。だからかいぼりでは、外来魚を徹底的に駆除することに最善を尽くさなくてはなりません。在来種減少の最たる要因が外来魚であるなら、外来魚の根絶に成功すれば在来種はおのずと個体数を回復してきます。

STEP 3 排水の陣

排水の工程は思った通りに進まないものです。作業時間と労力を多めに見積っておきましょう。長らくかいぼりをしていないため池では、栓や樋の位置が分からなかったり、壊れて機能しなくなったりしています。これを直したり、直せなかったらポンプ排水に変更したりするところに時間がかかり



▲かいぼりによる成果が確認され、全国紙や地域紙に何度も掲載された例（八王子市長池公園）



▲ 構造物を持ち上げ、残っている外来魚を探索する（井の頭恩賜公園）



▲ 排水の最終段階。捕り手とポンプで連携して外来魚を逃さない（上尾丸山公園）

ます。

ポンプで排水する場合には、上澄みの排水は順調でも、泥の多い低層水になると排水効率が低下したり、思わぬ箇所から流入水が見つかって水位が下がらなくなったりします。ポンプを増設するにしても、すぐ明日からというわけにはいかないので、日程に余裕がないとアウトです。

徹底した排水は、外来魚の根絶、水質改善、埋土種子の発芽をもたらし、かいぼり後の成果を豊かにする、一番肝心な部分です。

STEP 4 網を持たずに淵へ臨むな

かいぼりには準備が欠かせません。しかし、失敗を恐れるあまり、細かすぎる計画を作ろうとする事業主体と、完璧を求めて次々に細かな調査や作業を要求していく市民団体、という構図になりがちです。水深や底泥の堆積厚を綿密に測量する。排水スピードを調査するために相当な水量を抜いてまた湛水する。半日のボランティアのために半日の事前講習をする。こうした準備に気力・体力を使い果たしている事例があります。それでいて本番で外来魚駆除や干し上げが中途半端に終わっては、目も当てられません。これを「網持ち



▲ 池の循環設備内部で外来魚を探索。手の届かない配管内には石灰水を流す（光が丘公園）

過ぎて淵で転ける」と言います。

かいぼりで何が大事なのは、言葉を尽くして説明したところで、経験がないと理解しにくいものようです。したがって、最強の事前準備は「習うより慣れよ」、つまり、よそのかいぼりに参加してみることです。視察や見学で得られることは意外と少ないものです。勇気を出して作業に参加してみてください。（続くかもしれない）



▲ かいぼりがされなくなると樋の位置もわからなくなる（長野市信里）



▲ 排水用の「滞筋」を付けているのは研修参加者（三ツ池公園）